

カモ類の里帰りがスタート



寒波とともに、過去最大の総合個体数に！

越冬するガンカモ類調査は、今年で6年目になります。あきる野周辺に飛来した各種の最大個体数の合計は937羽となりました。過去の記録的な寒波（2017-18年の冬）の882羽を上回る個体数ですが、市内の池に例年にはなかった大きなマガモの群れが飛来したことにより、このような結果が得られました。また、オシドリについても、餌となるドングリの実りが良かったことなどの理由により、平年よりも数が多かったとみられます。

一方、最も数多く飛来する3種の内2種（コガモとカルガモ）の減少が目立ちました。その他のほとんどの種類も減少傾向にあるため、今年は複雑な結果になりました。

全体的な個体数が多かった一方、ほとんどの種類が減少という冬でした。

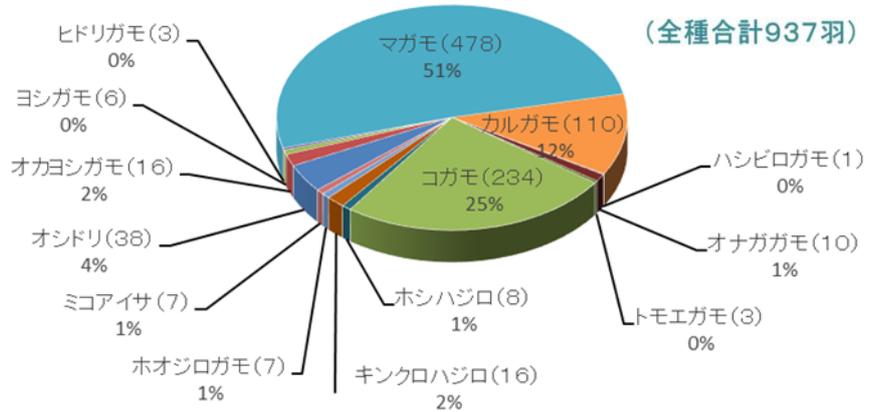
コロナ禍で人の生活に大きな変化が起きているため、以前に比べ自然の癒しや解放感を求め、特に河川敷で様々な活動をされる人で賑わう場面が増えたように思います。

自然は人の支えになります。自然を大切に想う人が増えた一方で、受け皿となる自然に負担がかかることもあって思われます。冬鳥などの野生動物の行動にその影響があるかも知れません。



今年も越冬のためにカモ類の様々な種類がこの地域に飛来しましたが、春がやってきたため、多くの種類は再び北上し、この地域から姿を消し始めています。冬の間、強い寒波は多くの地域に大きな影響を与え、野生動物の行動にも変化があったと思われます。このような寒波が発生する年は、比較的温暖地である関東平野部に飛来するカモ類が増加する傾向にありますが、今期は意外と期待外れで、ほとんどのカモ類はそれほど多くありませんでした。

各種類の最大個体数
(2020・21年冬期)



多摩川は東京の鳥の楽園としてよく知られています。今年の冬は市境付近の河川で、この写真に写っているキンクロハジロ（奥に♀7羽）やホシハジロ（手前に♀4羽）、オカヨシガモ（最右に♂1羽）以外にも、代表的なコガモやカルガモ、マガモ、さらに、希少なミコアイサ（パンダガモと呼ばれる美しいオスを含む）や、珍しいホオジロガモといったカモ類が飛来しました。

カモトピックス



寒波の影響で、寒さや各地域での大雪が話題になりましたが、東京は寒いというよりも、乾燥が印象的な冬でした。10月中旬から1月中旬までの3か月は全く雨がなく、あきる野の多くの池が干上がりました(写真)。そのため、カモ類などの水辺環境の鳥は水がある限られた場所に集まりました。



かつて、多摩川に数多くが飛来していたとされるヒドリガモは、現在のあるあきる野周辺で数羽程度しか見られないほどレアな種類になりました。まさしく、「昔は当たり前、今は珍しい」という種類の一つです。



今期は、市内のある池に400羽以上の大きなマガモの群れが飛来しました。写真はその群れの一部の様子ですが、市内で100羽以上のまとまったマガモの群れを確認したのは初めてでした。寒波の影響なのか、例年使っていた別の越冬場所に変化があったのか、市内にこの大群が現れました。いずれにしても、市内においての大きな池という環境はいかに大切であるかということがよく分かる出来事でした。

一年中、秋川溪谷で見られる最も美しい野鳥の一つ、オシドリ「夫婦」。

これまでに市内で一度しか出会っていない希少なトモエガモを今期は3羽確認しました。



今回の環境問題:アライグマ出没、続く...

春からは、冬鳥が飛び去ると同時に、多くの両生類の繁殖の時期に入ります。特定外来種であるアライグマは、それらの最強の天敵といっても過言ではないほど凶暴な存在で、被害により両生類の個体群が絶滅することがあります。

これまで、数多くのアライグマを捕獲してきましたが、高い学習能力により駆除できない個体が生き残っています。3月頃はまだアライグマが好む農作物や両生類以外の小動物が少ないこともあり、餌を求めて集中的に両生類の産卵場所に現れます。この頃は、アライグマの捕獲向上に努力しながら、今年こそ自然や農業などへの様々な被害の減少につながればと思っています。



地域の方々と掘った両生類の産卵場所(池)でヤマアカガエルを捕食するアライグマの様子